2023 8・21 月4回 月曜日発行 第1306号

週刊ビル経営

発行所 ㈱ビル経営研究所
〒104-0061
東京都中央区銀座7-17-12 2F
TEL 03(3543)7421
FAX 03(3543)5839
発行人 垂澤清三
年間購読料 33,000円（税込）
KAMEOKA NEWS AGENCY CORPS
亀岡大部取材班グループ

ソーコに学ぶビル経営

イーソーコ総合研究所
代表取締役　出村　亜希子
奈良女子大学大学院修了後CM会社を経て現職。一級建築士、宅建士。「倉庫ドクター」として建築面からオーナー支援に取り組む。

第63回「時を超えて紡ぎ、生まれるもの」

東京国立近代美術館で開催されている「ガウディとサグラダ・ファミリア展」を見てきました。1882年の着工以来、何度も中断しながら未だ建築途中のサグラダ・ファミリア聖堂。完成まで300年はかかると言われ、未完成の代名詞のように言われていましたが、技術の進歩などによって2020年代の終わりごろに完成できる見込みが立ったようです。その壮大な規模と独特の意匠は、異彩を放つ唯一無二の建物といえます。

実はこのサグラダ・ファミリア、構想から着工に至るまでにも16年の前史があります。当初設計を請け負ったフランシスコ・ビリャールはさまざまな事情から降板し、2代目に抜擢されたのがガウディでした。彼はこの壮大な聖堂が自分の生涯で完成させられないことを自覚していましたが、計画を縮小してまで完成させることを選びませんでした。むしろ拡大させるとともに大部分を後進に任せ、自身は一部分だけに力を注ぎます。それが、建物の東側面にあたるファサード「降誕の正面」です。

その後、紆余曲折がありながらも後に続いた建築家たちはガウディの遺志を継ぎ、建築を続けていきます。私が驚いたのは、ガウディが亡くなってずっと後になってから作られた部分に、ガウディの有機的で柔らかな作風とは全く異なる彫刻が据えられていることです。例えば、西のファサード「受難の正面」に据えられたジュゼップ・マリア・スビラックスの彫刻は、キュビズムの影響を受けて角張った抽象的な表現のものです。今でいうところの現代アートを組み合わせるようなものでしょうか。時代を超えて受け継がれていく建築物に新しい感性を取り入れる大胆さ、圧倒的なスケールの大きさを感じます。

建築物は、その時間軸も作品の一部として認識されることがあります。サグラダ・ファミリアのように長く建築が続いてきた建物は特殊な例かもしれませんが、計画時からはじまって建築時、そして完成後と、そこに関わる人たちの時を超えたチームワークによって連綿と受け継がれていくものです。前述のスビラックスの彫刻は物議をかもしたそうですが、結局は受け入れられました。計画当初のガウディの精神を自身で解釈し、敬意を払いつつ、そこに新たな息吹を吹き込んだからです。

建物を受け継ぎつつ、そこに新しい命を吹き込んでいく。建物とのそんな向き合い方は、私たちの業務にも通じるところです。これまでオーナーに寄り添って築古物件を生まれ変わらせるお手伝いをしてきました。リノベーションは新築とは違い、機能やコストなどの制約がありますが、そのなかで長きにわたり生き生きと現役で使われてきた建物をどう継承していくのか。そんな思いを馳せながら建物と向き合えることは、私たちの仕事の魅力だと思います。どんなビルだって、「サグラダ・ファミリア」なのですから。